第一二章　名古屋空襲

第三節　市街地空襲

1・3初の市街地空襲

昭和二〇年（一九四五）一月三日、米陸軍第二一爆撃軍司令官ヘイウッド・ハンセルは、はじめて名古屋市街地を第一目標とする焼夷弾爆撃を実施した。

これまでハンセルは、航空機生産工場の破壊を第一目標に、中島飛行機（東京）と三菱名古屋発動機・航空機への爆撃を続けてきたが、日本特異の亜成層圏以下の風向、風速の変化によって、高高度からでは爆撃の成果は十分ではなかった。ワシントンの第二〇航空軍司令官ヘンリー・アーノルド大将は、かねてよりハンセルに対して、市街地の焼夷弾爆撃をするよう勧告していた。ルメイが実施した漢口市街地爆撃の成功により、焼夷弾による低空爆撃こそ日本を焼滅させるのに最適であることが証明されていた。ハンセルは、一月三日、勧告通り名古屋市街地を目標にB29九七機を出撃させた。

マリアナを出撃したB29は、三つの経路により、すなわち①潮岬→伊勢湾→名古屋へ、②潮岬→大阪上空（一四時ころ）へ侵入し市街地焼夷弾投下ののち東進し滋賀→名古屋へ、③浜名湖方面→名古屋へと、五七機が目標上空に到達した。

警戒警報一三時四〇分、空襲警報一四時二三分に発令。日米開戦以来、四度目の新年を迎えた名古屋市民は元旦、二日と空襲のない正月を過ごしたのであったが、とうとう三日、B29はやってきたのである。

一四時四五分～一五時三三分に高度八四六〇～九四五〇メートルから焼夷弾一五〇トンを投下し、七五カ所から火災が起こった。この日、ハンセル准将は、焼夷弾に時限装置を付けるなど、実験的な焼夷弾攻撃を行っている。布きれの尾をつけた六ポンド（二・七キログラム）油脂焼夷弾を大々的に投下した。木造密集市街地に集束焼夷弾として使用し、時限信管を付けて降下途中、適当な高度で爆発させ、広範囲に散布できるようにしたのである。この日の被害は、死者七〇、負傷者三四六、被害戸数三五八八であった。焼夷弾が少量であり、水の用意があれば初期消火で延焼を食い止められたが（防空美談として新聞紙上をにぎわせた）、油脂焼夷弾の集中投下を受けると、バケツや火叩きでは消火することはできない。この日の空襲は、焼夷弾の大量投下に対するバケツ・火叩き戦法の愚かさをはっきりさせたのだった。

投弾後のB29は、知多半島から渥美半島を経て、それぞれ南東、南方洋上に脱去した。警報解除は、空襲が一五時三五分、警戒が一五時五五分であった。

正月休みのため学校、会社、事務所、倉庫など不在建築物が多く、これが火災拡大の原因の一つであった。また屋根を突き破った焼夷弾が天井裏に滞留し、燃えているのに気づかずにいることも多かった。そこで名古屋市教育局では、学校の天井板の取り外しを決定した（『中部日本新聞』一・七）。これは学校だけでなく工場、事務所、住家でも行うこととなり、検査は厳しく泥靴のまま座敷に上がる警官もいた（〈暖かい指導を警官に望む〉同二・三）。

市電は各所で不通となったが、とくに被害の著しかった西区菊井町・明道町方面を中心に、浄心～押切～菊井町～名古屋駅間、明道橋～菊井町～名古屋駅間、笹島～中村公園前間、六反学校～名古屋駅間は、翌四日朝九時現在も送電不能のため不通のままであった。このため、軍需工場への工員輸送には、「市営バスノ転換配置ヲ計ルト共ニ挺身隊トラック十両ヲ利用中村公園笹島町間工員輸送ヲ実施シタ」。

この日、B29の喪失は五機で、敵機（日本側）の迎撃は中程度ないし強烈と、『全容』はいう。一方、高射砲部隊は、市内菊井町一帯に焼夷弾攻撃をしているB29に対し五三四発の射撃をしたが撃墜することができなかったし、高射砲陣地にも焼夷弾の落下があり、二兵室と弾薬庫、猿面茶屋等を焼失した。弾薬庫の火災は、四時間も続き、高射砲弾三〇〇〇発、高射機関砲弾一万発を焼失するという損害を出した。

第一二章　名古屋空襲

第三節　市街地空襲

市街地焼夷弾爆撃へ戦術転換

昭和二〇年（一九四五）三月上旬になると、マリアナ基地のB29の保有機数は三八五機となり、日本の大都市に対する大規模な焼夷弾攻撃が可能となった。三月八日早朝、戦闘命令が発令された。三月九日（日本時間一〇日）東京、三月一一日（日本時間一二日）名古屋……。

作戦は夜間に爆撃高度五〇〇〇～八〇〇〇フィート（一五二五～二四四〇メートル）の低空から焼夷弾を投下するというものであり、しかも銃機など戦闘火器を取り外して敵地に侵空するというものであった。東京大空襲は、このようにして計画され実施された。三月一〇日午前零時から夜明けまでの大火災で死傷者七万とも八万ともいわれ、これほど多くの人命と財産が奪われた戦争行為はなかった。

市街地夜間低空空襲への戦術の転換を図ったのは、次のような理由によるものであった。高高度の昼間精密目標爆撃では気象条件に左右されることが多いこと、戦闘機の迎撃も夜間においては非常に少なく弱くなること、爆撃高度を下げることによって大量の焼夷弾をより正確に投下できること、航空燃料の消費を減らすことができその分だけ焼夷弾搭載量を増やすことができること、低空飛行は発動機にかかる負担も少なくなること、さらに高空での烈風と格闘することもないので照準機の使用ミスが減って爆撃精度が上がること、などである。この夜間空襲の実施が決まると、編隊飛行の必要はなくなり、単独爆撃は必然であった。B29は、通常出撃一機当たり八〇〇〇発の機銃弾を装備する。これと機関銃本体の重量を取り去ると、焼夷弾五〇〇発を多く搭載できるのである。単独飛行と火器装備の撤去により、焼夷弾搭載量は一機当たり平均六・六トンと飛躍的な増加を見ることになった。

敢行する日程も、爆撃計画と同様に大胆なものであった。司令官ルメイ少将は、最大規模の焼夷弾攻撃を東京、名古屋、大阪、神戸と一週間以内に継続的に敢行することを考えた。三月一〇日の東京大空襲から始まって、三月一九日の二回目（名古屋だけ繰り返された）の名古屋大空襲までのわずか一〇日間で様相が一変したのである。『戦史叢書』掲載の米陸軍公刊戦史によれば、三月九日以降の一〇日間に、一五九五機出動させ、九三六五トンを投弾した。この出動数は三月九日までの全出動数の四分の三であり、投下弾量は以前の三倍であった。この攻撃により日本の四つの主要都市と多くの重要目標を破壊したのである。

第一二章　名古屋空襲

第三節　市街地空襲

3・12市街地夜間爆撃

東京空襲を終えた最後のＢ29がマリアナ基地に三月一一日午後帰還してから二九時間経たないうちに、次の目標である名古屋市街地に向けて三一〇機が発進しはじめた。東京で用いたのとほぼ同じ戦術で、名古屋も焼き払おうというのである。

東京空襲では多くの搭乗員が不安を抱いての出撃であったが、それが成功したことで、基地は活気にあふれていた。東京では装備は全部なしだったが、ゆくゆくはＢ29に兵装のないことを知るだろうからと、一機当たり尾砲用に〇・五〇口径弾薬二〇〇発を積むことにした。東京と同じように、今度も先導機を定め、任務があたえられた。先導機には、技量優秀な爆撃士・航法士を選んで搭乗させて、先頭で低空の正確な爆撃を行って、後続機の目標となる火災を起こさせる任務である。M47焼夷弾が積載された。本来は一〇〇ポンドの重量でもって、主として大建造物の屋根を貫通させるため用いるものであるが、今回の目的は後続機の目印となる火災を発生させるためのものとなった。

東海軍管区司令部は、一一日二三時四二分警戒警報を発令した。やがてＢ29は、一機ずつ単独飛行で大幅に距離間隔を拡げて、波切より伊勢湾に、あるいは志摩半島を北上して西側より名古屋に侵入した。一二日〇時〇二分空襲警報発令となった。二八五機が目標上空に到達し、〇時一九分～三時一七分にわたって高度一五三〇～二五五〇メートルより焼夷弾一七九〇トンを投下した。「米陸軍航空軍史」によると、「目標地域は、この市のうち三角形のくさび状の部分で、建蔽率は四〇パーセントに近く、人口は一平方マイル（約二・五九平方キロメートル）当たり約七万であった」とある。東海道線と中央線が重なり合う地点、現在の金山総合駅辺りを指すのであろうか。

投弾後のＢ29は、守山上空から右折し岡崎そして豊橋、浜名湖から洋上へ、あるいは渥美半島から南方洋上へ脱去した。空襲警報が三時二五分、警戒警報が三時四一分にそれぞれ解除された。

米軍資料では、爆撃成果は、市街地の五六八九万二〇〇〇平方フィート（約五・二八平方キロメートル）を破壊し、愛知航空機永徳工場の三九万四六六〇平方フィート（約三万六六〇〇平方メートル）を破壊したとする。喪失機はわずか一機であった。ただ、東京よりも一二五トン多く投弾したにもかかわらず、東京を壊滅させたほどの災害はなかった。とはいえ、この日の被害は、死者五一九、負傷者七三四、被害戸数二万五七三四にのぼる。愛知県防空総本部の名古屋市部合計では、死者五八六、重傷一三四、軽傷九九四、全焼一工場二九二、住家二万五七八六、非住家一七二五、半焼一工場一七、住家八八四、非住家一一七、罹災者一二万五五五五である。

上前津～東別院間が攻撃の中心で、南は港付近から北は桜通付近にわたって攻撃を受け、被害は全市域に及んだ。なかでも中区を中心に、西に接する中川区、北に接する栄区、東に接する昭和区の一部、南に接する熱田区が最も激しい焼夷弾攻撃を受けて、この五区で全市の被害に対し死傷者の八五パーセント、家屋損害の九一パーセント、罹災者の八九パーセントを占めている。

被害に遭った重要施設のうち、全焼の主要施設を列挙すると、

熱田神宮勅使館・宮庁・神楽殿、東本願寺別院、中・昭和・熱田各区役所、名帝大医学部及同附属病院、知事・内政部長官舎、名古屋専売局、中税務署、国民学校一四、八高、県一高女・椙山高女・桜花高女・中川中、丸栄百貨店、露橋下水処理場。

この日の空襲は市街地爆撃であったが、前掲全焼工場数に見られるように、市街地に混在する多くの工場が被害にあったことが、注目される。

輸送関係では、省線、名古屋鉄道、近畿日本鉄道が一ないし二区間で不通となったりしたが、市電は被害が甚大で、各所で架線の断線により不通となり、全復旧には数日を要した。このため軍需工場への工員輸送は、貨物自動車輸送挺身隊の車両を名古屋駅前に五両配車してこれにあたるなどし、また罹災者用の食糧配給輸送、そして市電など復旧工事用への配車など、多方面で車両が必要とされた。

このあと米軍は、息もつかせず一四日大阪、一七日神戸へと大規模焼夷弾攻撃を続けて、一九日名古屋には再度大空襲を敢行するのであった。

第一二章　名古屋空襲
第三節　市街地空襲
3・19名古屋大空襲

第二一爆撃軍司令官カーチス・ルメイが、持論の市街地焼夷弾攻撃へ戦術を転換してから、二度目の名古屋市街地を目標とする大空襲は、三月一九日夜、実行された。三月一〇日の東京大空襲以来、毎度三〇〇機以上の出撃で大量の焼夷弾を携行したので、その在庫は急速に減っていた。こうしたなかで、持てるだけの焼夷弾を能力いっぱい積んだのである。グアム島の第三一四爆撃団はM69を、テニアン島の第三一三爆撃団はM47を、サイパン島の第七三爆撃団はM47とM76を積載した。そして三機に一機の割合で、五〇〇ポンド（二二五キログラム）爆弾を二発ずつ搭載させた。これは、二〇ポンド（九キログラム）の鋼片を飛散する人員殺傷目的の爆弾で、組織的な消火活動を挫折させるためのものだった。マリアナの三つの島から総勢三一〇機が出撃した。この日は、第二目標、臨機目標、最終順位目標などを持った機はなく、全機が名古屋市街地を目標に飛び立ったのである。

一二日と同じように、B29は単独飛行で志摩半島、伊勢湾、渥美半島等の広正面にわたって北上した。一時四五分警戒警報が発令され、二時〇〇分空襲警報が発令された。名古屋上空には二九一機が到着し、二時〇四分～四時四八分に高度一三五〇～二七〇〇メートルより焼夷弾を主に一八五八トンを投下した。投弾後のB29は、知多半島、渥美半島より南方洋上に脱去した。来襲時刻が、二時〇〇分より四時五〇分、空襲警報は四時五四分解除され、警戒警報は五時一二分解除された。

米軍資料では、市街地の八二〇〇万平方フィート（約七・六二平方キロメートル）を破壊し、焼失面積は一二日よりも大きく三平方マイルであったが、これで名古屋に二回合計して一億三九八〇万平方フィート（五平方マイル）の損害をあたえたとする（『全容』）。喪失機数はわずか一機であった。

この日の被害は、死者八二六、負傷者二七二八、被害戸数三万九八九三に及んだ。県防空総本部資料では、死者一〇二七、重傷五九七、軽傷二二九八、全焼－工場二六一、住家三万三八九八、非住家一四二四、半焼－工場五一、住家一〇九六、非住家九六、罹災者一四万二八八七に達する。一二日と同様、この日も名古屋の中心部が攻撃目標となったが、攻撃の中心は前回に比べて、やや北寄り上前津、大須付近であった。したがって栄・中区の被害が最も大きく、両区と西に接する中村区の被害がこれに次いでいた。この三区だけで、全市の被害に対し死者の七九パーセント、家屋損傷七〇パーセント、被災者の六七パーセントを占めた。三月一九日の空襲被害は、その後の六月九日の死傷被害を除くと、名古屋全空襲中最大のものである。一二・一九の両日の二回の空襲だけで、死傷者は別として、家屋損害および罹災者数は、名古屋空襲の全被害の半ばに達した。慶長年間以来の碁盤割の町並みをはじめ名古屋の中心部は、すっぽり無惨な廃墟と化してしまった。木造建造物ではほとんど火焔から護る術がなかったのである。

『名古屋消防史』は、その日の消防活動について次のように述べる。「注水の威力も今は無に等しかった。それは、われわれの常識をはるかに超越し、注ぐ水は只燃焼速度をにぶらせるに過ぎず、注水点を変えれば、揶揄するように忽ちそこからは熾烈な炎を噴き上げる有様であった」。その光景が、思い浮かぶ。

重要施設で全焼の被害にあったものを列挙すれば、次のようである。

> 愛知県護国神社、那古野神社、大須観音、七ツ寺、栄警察署、牧野消防署、栄・中川税務署、中川区役所、国民学校一五校、名工専、県立工業・中京商業・椙山高女・金城女専・享栄商業・市三高女・名中・明倫中・名機工・中京高女、勧業銀行名古屋支店、中部日本新聞社、御園座、三星百貨店、万平ホテル、松坂屋（四階以上内部焼失）、愛知県武徳殿、市図書館、食糧営団千種・中村・中川各区支所精米所。

交通関係の被害状況については、省線関係では笹島駅構内に焼夷弾が多数落下したため、駅長室、一・二番ホーム全焼、三・四・五番ホーム八〇パーセント焼失、貨車三二両焼失といった大きな被害をこうむった。また、名鉄新名古屋駅・近鉄名古屋駅も、一部焼失と架空線断線等により、不通となった。市電では、池下車庫・同運輸事務所・同変電所が全焼し、車両二四両が焼失したのをはじめ、長塀町変電所が全焼、市街焼失区域の市電架空線と電柱等はほとんど焼失のため各所で不通となった。

この日の空襲について、日本側資料は「被害ハ相当広範囲ニ亘ルモ重要工場等ノ被害ハ比較的軽微ニシテ生産力ニ大ナル支障ヲ来スコトナシ。然レ共市内在住工員ノ罹災者ハ相当数ニ上ル見込ニシテ且工員輸送上最モ重要ナル市電ノ不通ニ依リ工員ノ出動ニハ重大ナル支障ヲ生ズル状況ニアル」と述べる。トラックやバス等自動車を総動員して工員の輸送に当たったのであるが、日本通運名古屋支社や愛知貨物運輸、名古屋貨物自動車、愛知陸運など運送会社も建物の焼失や車両などの被害があり、また、罹災者の救済のための食糧・医薬品の輸送や復旧工事要員の輸送もあり、困難をきわめた。なお、空襲により焼け出された者は、罹災証明書を呈示することによって、交通機関を利用することができた。しかし、「一二日空襲以来其ノ状況ニ依リ省線私鉄共無賃輸送ノ便宜ヲ供与シツツアルガ三月二十二日現在其ノ合計ハ三六四七一名ニ上ルガ（略）本措置ハ三月二十三日限リトシ爾後ハ事情真ニ止ムヲ得ザル者以外ハ取扱ワ」ないことになった。

この二回目の名古屋大空襲で、三月の焼夷弾電撃戦は終了した。B29群は、日本の四つの中枢都市を軒並みに焼け野原にしたのである。『戦史叢書』に収録されている米公刊戦史によれば、ワシントンの首脳部は、三月の焼夷弾攻撃の成果を検討したあと、全体的にみて日本の工業は主要都市に集中しているので、都市の焼夷弾攻撃により工業を壊滅させることができると結論した。

第一二章　名古屋空襲

第三節　市街地空襲

5・14北部市街地昼間大爆撃－名古屋城炎上

昭和二〇年（一九四五）五月一一日、米陸軍第二一爆撃軍は沖縄作戦の支援を解除された。その同日、米陸軍第二〇航空軍司令官アーノルドは、ルメイに対して日本本土に対する焼夷弾攻撃を強化するように命じた。

この新たな焼夷弾爆撃の最初の目標は、名古屋北部市街地で、五月一四日の昼間と決定した。大都市焼夷弾攻撃は例外なく夜間であったが、この日は最初の白昼焼夷弾爆撃である。これは、日本の防空陣を混乱させること、そしてまた一つは、正確な爆撃をするためであった。建物の密集地域に混在する中小工場と名古屋城周辺の市街地を焼き払おうというのである。五二四機が出撃した。それは、これまで出撃した最大機数であった。B29は、御前崎、波切、潮岬南方洋上より広正面にわたり伊勢湾、志摩半島を北上し、三重、奈良、滋賀、岐阜を経て名古屋に侵入した。早朝六時二三分警戒警報発令、空襲警報が発令されたのは七時五〇分だから一時間以上も経っていた。

先頭機が目標上空に到達したのは、八時〇五分であった。『全容』には爆撃機数の記載がなく、その割合が八九・六八パーセントとしているが、航空戦記雑誌は三冊とも四七二機、公刊戦史も同じである。爆撃が終わったのが九時二五分、高度四八六〇～六一五〇メートルから焼夷弾二五一五トンを投下して三・一五平方マイルを破壊した。喪失機は一一機であった。

この日の空襲のすさまじい状況について、防空総本部の「空襲被害概況」は次のようにいう。

> 1 来襲機数極メテ多数ニシテ且被弾地域ガ局限セラレタル為極メテ濃密ナル爆撃ヲ受ケ待機シ出動セントセバ直チニ次ノ編隊来リ一時待機シ更ニ出動セントセバ復々次編隊来リ初期防火ニ多大ノ支障ヲ来セリ……一戸ニ数十発ノ焼夷弾命中……被弾状況……約一米間隔ニ落下……。
>
> 2 未ダ嘗テ無キ局地濃密爆撃ノ為殆ド各所ガ同時ニ発火シ夫々独立シタル火災ニシテ従来ノ如ク数ケ所又ハ十数ケ所ノ発火点ガ漸次拡大延焼シタルト趣ヲ異ニシ投下地帯一斉ニ火ノ海トナリ烈風起リ黒煙蔽イテ文字通リ天日為ニ暗ク消防配置活動上極メテ困難ヲ来セリ……。

完全にお手上げの状況であったということであろう。また黒煙が空を覆い暗くなったという状況だったため、この日の空襲は夜だったという人も多い。

投弾後のB29は、岡崎、豊橋を経て南方洋上に脱去した。空襲警報解除九時四〇分、警戒警報解除九時四六分であった。

この日の被害は、死者二七六、負傷者七八三、被害戸数二万一九〇五であった。防空総本部の名古屋市部合計では、死者三二六、重傷一〇九、軽傷二一五、全焼－工場九二、住家一万七八二〇、非住家四一三六、半焼－工場一一、住家四七〇、非住家一三四、全壊－住家一、非住家二、罹災者五万七二〇八となっている。千種区、東区のそれぞれ北部、北区、西区など北部一帯が攻撃の目標となったため、特に西区の被害が大きかった。同区は、これまで一月三日の空襲以外は、比較的被害の少ない区であったが、この日ばかりは、全市の被害の約四〇パーセントに達するという大きな被害を受けた。

重要施設の被害について、全焼のものをあげれば、次のとおりである。

> 名古屋城天守閣、元離宮、東照宮、陸軍航空本部名古屋監督班事務所、東海軍管区司令部別館一棟、東海軍管区司令部第二庁舎（大部焼失）、田代消防署、北警察署、少年審判所、名古屋貯金支局、名古屋刑務所二棟、名帝大工学部、県二高女・第一師女子部・常磐高女、国民学校一一校。

この日の猛火と空を覆った黒煙がおさまったあと、名古屋城天守閣が忽然と消え失せてしまったことに気付いたときの驚きと、一種の虚脱感を感じた人は多い。当時、名古屋城の副監視長をしていた原田尊信が、昭和四七年五月一四日、空襲体験を語る会において、次のように話している。

> 城の管理責任者の一人で公舎に住む。空襲警報の時は、出なくともよいことになっていた。あの日は、閉鎖はしていないが、拝観者は居なかった。当時、鯱を下に降ろす作業の足場を組んでいて、そのため窓が三つあいていた。B29焼夷弾がそこに

落下した。おそまつな防火器具や体制では消火はとても無理で、職員もほとんど出て来ていない。まったく手が打てず、燃えるのを傍観していたのと同じであった。襖絵などの国宝は三河に疎開していた。燃えるときは、屋根は銅だから紫色の炎を出した。鯱の金はカレー粉のようなものとして残っていた。天守閣は、西北の方へ崩れた。燃えるのに約三時間かかった。その炭は二百俵あまりとれた。予想もしなかったお城の炎上だった。名古屋城は、名古屋市民のシンボルであり、心の支えにしていたのだが、非常に残念でならない。（以上要旨）（『名古屋空襲誌』第六号）

交通機関では、名鉄瀬戸線の大津橋駅が全焼、堀川〜大曽根間が一時不通となった。市電では電柱焼失、架線断線で多区間が不通となったが、名古屋港湾労務報国会より多数の緊急労務の応援を得て、焼失電柱二七〇の植替作業を雨のなかで行うなどして、翌一五日朝までには開通した。名鉄バスでは大曽根営業所が全焼しバス二〇両を焼失した。

この日は、春日井、守山、志段味、猪高、山田、西枇杷島、清洲、豊山、楠など周辺の町村にも被害があった。

第一二章　名古屋空襲

第三節　市街地空襲

5・17最後の南部市街地夜間大空襲

名古屋城と周辺の市街地を焼野原にして帰還したばかりというのに、またも名古屋を目標に空襲を行うのである。今度は、南部の焼け残っている住宅密集地と、それとともにドックと工場群を焼き払おうというのである。夜間空襲を敢行するので、一四日よりも低空爆撃が可能であるから焼夷弾を多く積載した。マリアナの三つの島の各基地より、総数五一六機が出撃した。B29群は、波切の南方海上より志摩半島を北上し、奈良、滋賀を経て岐阜より、また知多半島を北上して、それぞれ名古屋に侵入し、なかには伊勢湾より直接侵入する機もあった。警戒警報が五月一七日〇時一七分、空襲警報は〇時三〇分に発令された。

目標上空に到達したB29は四五七機で、二時〇五分より四時五八分まで、高度一九八〇〜五五〇〇メートルより焼夷弾三六〇九トンを投下した。これは、名古屋空襲のなかでの最大の投弾量であった。一四日の一機当たり平均五・三トンに対し、今回は一機当たり平均約八トンを搭載していたのである。煙と上昇熱気流のために、後から市内に侵入する機は、爆撃高度を上げて目標を探すことになり、レーダー爆撃を実施した。だが、夜間空襲のときは、戦闘機の迎撃も、対空砲火も弱い。日本軍はレーダー射撃ができなかった。電波兵器の立ち遅れが、防空情報の収集の点でも、防空戦闘の強化の点でも決定的な障害となっていたのである。B29に損傷を与えても撃墜にはいたらず、喪失機は三機で、一六機が帰途硫黄島に着陸した。一三八件の火災を起こし、三・八二平方マイルが焼失した。投弾を終了したB29は、岡崎、豊橋、浜名湖より南方洋上に脱去した。警報の解除は、空襲が四時三〇分、警戒が四時四一分であった。

この日の被害は、死者五〇五、負傷者一三〇〇、被害戸数二万三六九五であった。防空総本部の名古屋市部合計では、死者四七六、重傷四一八、軽傷七二六、全焼－工場四一四、住家二万一九七八、非住家一三九八、半焼－工場三九、住家八〇五、非住家八六、全壊－住家一五、非住家二、罹災者九万一九四一となっている。

この日は熱田区、南区の被害が最も大きく、この両区に接する中川、港、瑞穂、昭和の各区がこれに次ぎ、中区の被害も少なくなかった。これで繁華街というべき街は、あとかたもなく焼き払われたといえよう。

この日の重要施設の被害について、全焼分をあげれば、以下のようである。

尾陽神社、高蔵神社、西別院、南・中川警察署、高蔵消防署、警備隊第二大隊、西税務署、港郵便局、南区役所、享栄女商・熱田高女・緑ケ丘高女・桜花実践女・瑞穂高女・市一工・愛実高女・中部神祇学校、国民学校一六校、東海銀行尾頭橋支店・日本貯蓄銀行八熊支店、食料営団水主町精米所。

南部市街地とともに目標とされた南部の工場で建物に被害を受けた主なところは、次の通りである。

愛知時計電機本社工場、同瑞穂工場、愛知航空機永徳工場、同熱田発動機製作所、愛知自動車配給統制会社、日本車輌本社工場、大同製鋼熱田工場、同築地工場、同星崎工場、同宝生工場、住友金属工業、三菱航空機大江工場、同南郊工場、同瑞穂工場、岡本工業笠寺工場、名古屋造船、日本碍子、高野精密、名古屋螺子、三菱道徳工場など。

また、交通関係施設では、省線では熱田駅、笠寺駅、笹島貨物駅、白鳥駅、名古屋港駅が、全焼などの大きな被害を受けた。名鉄も、名鉄本社、神宮前駅、神宮前乗務区、熱田変電所、大江駅、山王駅、築港駅、堀田駅、伝馬町駅が全焼したのをはじめ、車両多数を焼失した。さらに電柱の焼失・倒壊による架線の断線、軌道損傷のために各所で不通となった。市電も、架線の断線及電柱焼損（約三八〇本）によりかなりの範囲にわたって不通となった。さらに、沢上車庫、老松車庫、安田車庫、西町工場、瑞穂・大江・船方・都島の各変電所が全焼するという甚大な被害をこうむった。

この日は、天白、鳴海、山田、楠、富田、南陽、上野、大高などの町村にも被害が及んだ。米軍は繰り返し市街地に対し焼夷弾爆撃を行なったことで約二〇平方マイルを焼き尽した。これは、約四〇平方マイルある市街地の約半分であり、これを以て名古屋は市街地爆撃目標のリストから消去された。地域爆撃の対象としての名古屋は片付いたし、

最大の目標であった三菱発動機をはじめ諸工場は破壊されていた。しかし、市内にはまだ無傷の目標が残存しており、米軍は対日戦勝の日まであと三回の目標精密爆撃を加えることになった。その一回が、第一節でとりあげた六月二六日の五工場への爆撃であり、二回が、同じく七月二四日の愛知航空機永徳工場への空襲であり、三回が、日時の順序は逆であるが六月九日の愛知時計電機・愛知航空機への爆撃であった。